

子どもが自ら安全に行動し、他の人や社会の安全に貢献できる資質や能力の育成
—自分の命を自分で守るために—

大阪市立堀江小学校

1. 研究主題設定の理由

本校は都心部ということもあり、タワーマンションが立ち並び、人口、建物が密集している地域である。そのため児童も増加傾向にあり、1400 人を超す過大規模校となっている。校区の様子としては、長堀通や四ツ橋筋など大きな道路が多数あるため、交通量が非常に多く、大きな道路から1本道をそれると基盤の目状になった道路は細く、歩道部分が狭いうえ、交差点の見通しも悪くなっている。それを踏まえ、考えられる本校の課題は次のようになっている。

1つ目は、登下校中の安全確保についてである。児童数が多いことで登校時の正門付近はいつも混雑している。また、登下校時におしゃべりに夢中になり歩道いっぱいに広がったり、突然飛び出したり、確認せずに交差点を横断したりと危険な行為が目立っている。

2つ目は、交通マナーが未熟、交通ルールの知識不足である。
道路標識・歩道橋・地下道・ガードレール等設備面についての知識、「右、左、右を見て渡る」など、意味を理解したうえでの交通ルールの学習などが、それに挙げられる。しかし、交通ルールを守っていても相手の不注意で事故に巻き込まれるケースもあることから、周囲の危険の可能性に気づき、事故を未然に防ぐ危機管理能力を高める必要がある。

3つ目は、危険予測ができていないところである。児童は自動車が見えていれば、危険を察知することができるが、路上駐車している車や自動販売機・建物の壁などで自動車が見えていなければ、大丈夫と判断してしまう。危険を予測しながら安全に通行することができるのは、中学生になってからだと言われているが、映像資料を活用して危険を予測し話し合ったり、認知バイアスを理解することで思い込みを回避する方法について考えたりするなど、小学校段階においてもできることがあると考える。

4つ目は、自転車の運転技能が低いというところである。3年生以上になると自転車に乗ることが多くなるが、運転技能が育っていない状態でも友だちとおしゃべりをしながら並走したり、自転車で追いかけっこをしたりと危険な運転をしている様子を見かけることがある。また、キックボードや J ボードなどの遊具もよく利用している。最近では道路でスケートボードをしている状況が危険なことから、地域から連絡を受けることもあった。自転車は軽車両であり、自分の運転次第で加害者にもなり得る乗り物なので自転車に乗るうえで知っておくべき知識・運転技術の向上は必要であると考え。

それらを踏まえ本校では、安全教育における研究テーマを「子どもが自ら安全に行動し、他の人や社会の安全に貢献できる資質や能力の育成」と設定した。

2. 研究の趣旨

目標として助け合い、学び、生きる精神を第一として、関わる人を大切にする態度をはぐくむことである。安全については、理解し、情報を収集し、状況を判断し、行動を選択できる、危険に対応できる汎用的な資質・能力を獲得するとした。具体的にめざす子ども像としては、自ら進んで、安全の維持や向上に努力できる子、自他の安全に目を向け、他人への優しい言動ができる子、安全を見守ってくれている様々な人や地域に感謝する子としている。つまり、交通安全教育の学習において、それぞれの発達段階に応じた「知識・理解」「思考・判断力」「人間

力」を養うことをめざしている。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点①助け合い、学び、生きる精神を第一として、関わる人を大切にする態度をはぐくむことができているか。

安心・安全に過ごすための知識や行動をどのように獲得し、どのように活用するか。また、自分だけではなく周りにどのように伝えていくのかということで、ここでは、6学年の実践を述べたい。6年生では、「道路にひそむ危険から身を守ろう」というテーマで、日常生活で感じたヒヤリハットを交流する中で、交通安全に対する課題があることを明確にし、交通安全を自分事として捉えられるようにすること、自分がルールを守ればいいという段階に留まらず、交通事故から1年生の身を守るという自助から共助といった他者を意識することを目標に取り組んだ。1年生を交通事故から防ぐために自分たちに何ができるのかをまず考えた際、1年生へ交通安全についての授業を行うこと、そして1年生の保護者へ交通安全について働きかけることという意見が出た。それをもとに授業チームと働きかけチームの2チームに分け、そこからさらに授業チームを、授業を考える班と授業で使用する資料を集める班に分けた。保護者働きかけチームは、1年生とその保護者が一緒に交通安全に取り組めるように手紙を作成することにした。1年生の身を守るという中心の課題を設定し、活動を進めたことで、どちらのチームも調べ学習を進めるうちに、インターネットだけではなく、実際に1年生の担任や生活指導にあたる教員の話聞き、より正確に1年生の実態を掴みたいとの声が挙がり始めた。その際、自分の家族や教員、地域の方々から直接話を聞くことで、自分自身もたくさんの人に見守られていることも実感できたようだ。

授業チームは授業班と資料を集める班が考えた授業構成をもとに、1年生に伝えるべき内容を付け加えたり、伝え方の工夫などを提案したりした。それぞれの班が情報収集してきたことをふまえて、1年生が交通事故を自分事として捉え、自分自身の身を守るために大切なことを意見として出し合い、授業の内容を再構成することができた。働きかけチームは、堀江小学校に通う1年生の実態や課題から、手紙の内容を1年生の現状・危険箇所マップ・自転車の危険性・事故の特徴・自転車保険・道路標識など、交通知識をのせることにした。

このように、それぞれの班が情報収集し大切だと思うことを交流することで、1年生の身を守るために保護者が理解しておかなければならないことに焦点をおき、考えを深めることができた。最終的に授業チームは、新型コロナウイルス感染症対策の観点から、1年生への授業はオンライン形式で行った。自分たちが授業者となるのはもちろんのこと、画面越しに教えるということが初めての児童にとって、戸惑いながらではあったが、全員が協力し、一致団結して授業に臨むことができた。1年生は、6年生の話をよく聴き、楽しみながら交通規則を守る大切さを理解することができた。

保護者働きかけチームは、手紙だけでなく、他学級の協力のもと、ポスターも作成した。学校掲示をすることにより、来校する保護者や、他学年の児童の目にも触れ、長期的な啓発にもつながることができた。

視点②安全について理解し、情報収集・状況判断・行動選択できる・危険に対応できる、汎用的な資質・能力を獲得できているか。

視点2については、低学年の実践の中に多く含まれているため1, 2, 3年生の実践をもとに述べたい。

1年生の交通ルールへの知識や経験は浅く、横断歩道の渡り方、信号を守ること、道路で遊んではいけない。という、ことは知っていてもそれを生活の中で、気を付けているかという、少し不安な部分がある。そして、入学するまで、保護者と行動することも多かったため、自分で考えて道路や歩道をわたるためには、どうすればいいか。ということで、まずは、「道路にはどんな危険があるのか。」について考えた。横断歩道がない道路の時、横断歩道がある道路の時、考えられる事故やどんなことをすれば危ないか。を資料の中から想像させた。子どもたちからは、「飛び出してはいけない。車が来るかも。多分大丈夫。」といういろいろな意見が出た。そして、そのあと資料と同じような状況にある、校区内の道・横断歩道の写真を提示することで、子供たちは自分たちの地域にも危ない道路や気を付けなければいけない場所があることを知ることができた。また、家庭学習で通学路を保護者と一緒に歩いて、道路にはどんな危険があるのかを、保護者と一緒に確認するというこもした。

それらを通して、歩道の歩き方や横断歩道の大切さ・信号がある道・信号がない道・歩道がない道・交差点で死角があるときなど、あらゆる道路で安全に道路を歩くには、具体的にどんなことに気を付けるのか、という自分の生活に結び付けるさらなる学びへと進めることができた。そして、学習のまとめとして、道路を歩くときは、「はしっこ、いちれつ、あるく」、道路を横断するときは、「とまる・みる(右・左・右)・まつ」というルールを設定し、1年生みんなで取り組むことにした。この学習の成果として、道路を歩く時の基本的な交通ルールを身に付けることができたことや、保護者と一緒に危険箇所や交通ルールを確認できたことで交通安全についての意識が高まったことが挙げられる。また、子どもたちの中には、お互いに「廊下は走ったらだめだよ」「廊下は右側通行だよ」と校内で声を掛け合う姿もよく見られるようになったので、これからも子供たち同士で安全に過ごすことができるような意識を高めることができるように継続して取り組みたい。

2年生では、「堀江自転車運転免許証をとろう」というテーマで、「自転車での安全な道路の横断方法を知ること」、「安全な自転車の乗り方を身に付け自分の生活にむすびつけること」を目標に取り組んだ。学習展開の流れは、先ほどの1年生の展開と同じように、DVD教材を使って自転車を使ううえでどんな危険があるのか、自転車に乗るときのルールなどを自転車による危険について考えることから始めた。そして、家庭学習の中で保護者と一緒に、通学路や自分の住んでいる地域の信号や道路標識を中心に確認し、横断歩道・交差点など歩行とは違う視点でどんな危険があるのか、どのように自転車で通行すればいいのかを考えるようにした。自転車は歩行とは違い、自転車というものを扱うこと、運転技能がいることから、自転車の乗り方だけではなく自転車の点検の仕方も確認した。点検の仕方については、「ぶたはしゃべる」をもとに、「ぶ」はブレーキ、「た」はタイヤ、「は」は反射材、「しゃ」は車体、車体については、サドルは高くないか、ライトはつくかどうか、チェーンはゆるんでいないかなどがあげられる。「べる」はベルがなるかについて学んだ。この「ぶたはしゃべる」については子どもたちも普段から点検することとはなかったため、自分でも点検することができることに驚きと嬉しさがあった。

点検の仕方を学んだあとは、あらゆる状況にある道を安全に通行する方法について考えた。

見通しの良い道、見通しの悪い交差点、交通量の多い道路、人通りの多い道、信号のない交差点、歩道がない道、車などの障がい物で歩道がふさがれている道、横断歩道での自転車ゾーン、曲がり角。これらは保護者と一緒に確認した自分の住んでいる地域にある道路である。やはり、自分の住んでいる地域と結び付けて考えることは非常に効果的であると実践していても感じる事ができた。そして、調べ学習や保護者との家庭学習のまとめとして、実際に自転車を使い、実技試験として、校庭に3つのコースを作り運転技能試験を行った。コースについては、信号機と自転車横断帯がある横断歩道ゾーン、信号機なしの交差点ゾーン、障がい物をよけて通行するゾーンを設定した。活動は4・5人のグループを作り、自転車に乗る様子を他の児童がタブレットで撮影し、撮影者以外は試験官という役割で行った。動画を撮影することで、その場で活動を振り返ることができ、話し合いが活発に行われていた。しかし、児童に試験官を任せたことで試験合格の基準があいまいになり、合格か不合格かわからず、戸惑う場面も見られたり、実際に運転してみると停止線手前で止まれない児童や障がい物をよける際に一度止まらず、後方確認せずそのまま進んでしまったりという運転技能の未熟さも見受けられる場面もあった。実際に自転車に乗って、安全な通行ができるか。という点には運転技能の未熟さによる課題はあったが、単元を通して、1年生からの安全な歩行につなげて、自転車での安全な通行方法について深く考えることができた。

3年生では、ほりえ安全マップ「かもしれないマップ」をつくろうをテーマに、校区内の交通事故が起こりうる場所を主体的に見つけ、「～かもしれない」という視点から歩行や自転車での通行を意識して日常生活に活かすことを目標に取り組んだ。まず、単元の導入として、教師が堀江の地域内の道を目線動画撮影で自転車走行を行い、自転車と出会い頭衝突をする交通事故の場面映像を作成し視聴した。これはスケアード・ストレート方式という教育方法で、恐怖を実感することでそれにつながる危険行為を未然に防ぎ、交通ルールを遵守することの大切さを体感させる教育方法である。もちろん心的外傷につながらないように配慮は必要だが、写真やイラストではなく動画として見ることで自分事として捉え、こうすれば安全に生活できる「交通安全」というプラス思考をしっかりともたせることができた。地域の中にも交通事故につながる場所があるかもしれない。という視点を持ち、情報収集のため校区探検を行った。校区探検では、西六（新町・立売堀）地域・堀江（北堀江・南堀江）地域の2ブロックに分け、さらに地域をそれぞれ1・2丁目、3・4丁目とブロックを分け、それぞれの地域について丁寧に考えるようにした。校区探検にはタブレット端末を用い写真や映像を撮ることで現場の様子を何度も見返ることができるようにした。そして、危険性がある場所をメモし、収集した情報を校区地図にまとめていった。危険個所のメモを取る際はただ危険というだけではなく、危険だと感じる理由についても考えさせるようにした。調べた危険箇所については、項目ごとに色分けをした。橙色：出会い頭、水色：車が多い、黄色：とび出し、紫色：スピードの出しすぎ、桃色：自転車が多い、緑色：看板・車・自転車等の放置である。項目毎の色分けカードを貼る作業を進めていくと、「この交差点はみんながオレンジ色を貼っているから、それだけ出会い頭衝突が起こるかもしれないってことだね。」とつぶやく児童や、多くのカードが貼られている場所には、「この道は本当に危険が多いから普段からみんなが気をつけている道だね。」等の会話が増えていく姿が見られた。そしてそこから、校区を探検してきた当たり前に事故が起こりそうな大通りなどはもちろん、ひょっとしたら起こりうる、「かもしれない」というキーワードをもとにポイントの精選を行い、かもしれないマップ作成に至ることができた。単元の最後に振り返りを行った際、「校区探検」・「マップ作り

に向けた話し合い」・「マップ作り作業」という項目に分けて努力した所や工夫した所の振り返りをしたところ、「安全を守るために一生懸命考えて取り組めた。」「今まで気づけていなかった危険があることがよく分かった。」「みんなで協力して作れてよかった。」等、全児童の達成感を十分に感じる事ができた。また、これから自分にできることは何かという質問に対し、ほとんどの児童が「今まで以上に交通ルールを守って安全に気をつける。」と答えていた。

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

令和元年度より、交通安全教育に重点を置き、3年間の研究と実践を重ねてきた。新型コロナウイルスにより活動は制限され、時短登校あるいは学級休業となり、思うように実践を進めることが難しい状況もあったが、最後まで学校全体で取り組むことができた。今年度は、SPSの再認証を受け、教職員も改めて意識を高くもち、取り組むことができたと感じる。

まず、成果としては、3年間交通安全教育に重点を置いたことで、教職員の交通安全に対する意識が高まり学習内容を充実することができた。それにより、学年の発達段階に応じて、必要な交通安全の知識を精査し、交通安全カリキュラムを策定するまでに至った。1年生は「歩行について」、2年生は「自転車のルールについて」と、まずは低学年のうちに交通ルール・マナー等の知識をしっかりと学習していくこととする。3年生は、社会科で「わが町探検」があることから、自分たちの校区に目を向け、歩行・自転車での移動の際、地域の中にどのような危険があるかを調べ、「安全マップ」を作成することとする。4年生は、1年間通して防災教育に力を入れることとしていることもあり、道徳科の「ほんとうに安全な乗り方とは」の中で、事故の原因は心の状態も影響してくることを考えたい。5・6年生となると、自身の行動に目を向けたり、地域だけではなく、社会全体に視点を広げたりして、今まで学んだことを活かし、啓発活動等に取り組んでいきたい。

このように、6年間通しての実践計画を立てたことで得られた知識が、1年で終わってしまうのではなく、継続して繋げていける実践をこれらも取組続けたいと考える。今年度は、新校舎の完成に伴い、正門が変わり通学路が変更された。それにより、児童の登下校での安全が確保されない環境があったことから、登校時間の道路の通行規制を行ったり、道路に歩行者用のグリーンラインを引いたりするなど、地域・警察とも連携し、学校と一緒に交通安全について取り組むことができたことも成果と言える。児童は、交通安全教育に取り組んだことで、少なからず、自分事として捉えることができるようになった。登下校の様子を見てみると、信号のある道路では、信号が点滅するのに気づくと横断歩道の途中だと駆け足で渡り切ろうとしたり、信号手前だと次に青になるまで待ったりしている。信号のない横断歩道では、左右を確認して、慌てずゆっくり渡ろうとしたり、車や自転車が近づいてきた際は運転者とアイコンタクトしたりする姿も見られた。児童一人ひとりの交通安全に対する心がけは確実に向上していると言える。しかし、一部の児童の中には、道路で遊ぶ・道路をななめに横断する・通学路を守らない等の行動も少なくない。我々教職員、そして保護者・地域が、児童の安全を守るためにも一体となって今後も交通安全に取り組んでいかなければならない。そのためにも、この3年間で取り組んできたことを活かし、これからも継続して、校内研修の実施・保護者を巻き込んだ実践・地域と連携した活動を実践し、PDCAサイクルをさらに潤滑にしていくことと共に、学校の安全教育の質の向上をめざしたい。

(2) 今後の課題

今年度からは、「学校安全」に重点を置き取り組むこととなる。しかし、過去6年間で取り組んだ「災害安全教育」「交通安全教育」のPDCAサイクルも回していかなければいけない。本校は、教職員の異動が多いことで、毎年積み重ねてきたことがリセットされてしまうことも懸念されるが、今後もSPS部会を中心としつつも、教職員一人ひとりが意識を高くもつことができるように、学校全体で力を合わせて取り組んでいきたいと考える。